
鬼を食らう毒

ジグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼を食らう毒

【Nコード】

N3594BA

【作者名】

ジグマ

【あらすじ】

鬼と娘の、歪な恋情。

毒を食らう

季節は冬、山は見事な雪化粧を施している。

はじめて出会った桜の根に頭を預け、仰向けに寝転んでいる美しい鬼がいる。

すでに狂ってしまっている鬼は、これから殺されることもわからぬようだ。

否、殺されることを待っていたのかもしれない。

鬼はいつのころからか、自分というものが消えていつていることを感じていた。

それは不相应に与えられた時間のツケ。

必ず支払わなければならない代償だった。

「ごめん…」

首が落ちるその瞬間、仰向けの美しい鬼はそういった。

ずっと虚ろだった瞳に、その一瞬だけ光が蘇る。

愛してやまないその瞳は間もなく、光を失った。

左手に握り込んでいるのは、その鬼の討ち取った血まみれの刀だ。

毒女の血肉を練り込んで打った刀は、すべてを切り裂くといわしめる魔刀。

本当に見事な切れ味だった。

首を落とされ自らの血で赤く染まった鬼は、けれどとても美しくかった。

そのあまり美しさは、この体を猛毒のように苛んでいく。

その日、最愛の鬼をこの手で殺した。

闇に潜む毒

ときは昔。

されど昔とも異なる世界。

闇の眷族と呼ばれる、妖怪類のものたちが当たり前前に存在している。百鬼夜行、狐の嫁入り、魑魅魍魎が跋扈する。

その中でとくに強い力を持つものがある。

鬼と呼ばれるものたちだ。

それは人に似て、人にあらざるもの。

額より生えし角を闇に光らせ、鋭い爪で裂いた人を食らう。

人を捕食して生きる鬼を、人は人類の仇として刀を向けた。

その終わらぬ戦はやがて、毒女どくめと呼ばれるものらを生み出した。

毒を食らい、闇を食らうというその毒女の力は凄まじい。

その血肉は簡単に鬼をも殺し、さらには人をも殺す最強の毒となる。

その毒女の方法は、生きた人の赤子だ。

日々あらゆる毒を摂取させながら、一切光が射さぬ暗闇で15年ほどかけて育て作り上げる。

やがて全身の血肉が毒に侵されたら毒女の完成だ。

たったそれだけのことながら、これがどうして育ちにくく非常に貴重だったりする。

まず生まれてすぐの赤子に毒を交えた乳を飲ませ、毒女になれる素材なのかを選別をするのだが、これが一番の難関だ。

大概の赤子がそこで命を落としてしまうからだ。

それを乗り越えた赤子だけを、今度は妖怪たちの領域でもある闇の中で育てるわけなのだが、弱いものは闇に心が食われて使いものにならなくなる。

その名の通り、女ばかりを使うのは育てやすいからという理由らしいが、今になってはもうよく伝わっていない。

ただ千人の赤子を使い、一人毒女ができたらいというほど貴重な存在なのは確かだった。

待ちに待った、久方ぶりの朔日。

ようやく訪れた宵闇に、闇に潜むなにかが喜びにつごめくを感じる。

それはざわめきにも似た、体の芯に絡みつくうねりのようにも思える。

星の明かりしかない暗闇の中、のんびりと歩く娘が一人。

ずいぶん上等な布で仕上げられている着物はしかし、刺繍一つない簡素なもの。

肩ほどしかない黒髪は右耳の下辺りで縛られ、緩やかに揺れている。

毒女として育てられた彼女は、名をカルマといった。

カラコ口と小気味よく下駄を鳴らして歩く。

そうするとまもなく、カルマが目指す桜の木が見えてきた。

このあたりでは一番立派だというその木は、樹齢400年だとか。

実際両の腕をあらん限り伸ばしても、回しきれないくらいその幹は太い。

ちよつと今が見ごろらしく、満開の花がカルマを迎えてくれた。

その根元に腰を下ろした彼女は、ぼんやり満開の花を見上げる。

吹く風が合わせ、ひらひらと落ちてくる花弁をそつと拾ってみた。

星の明かりでその輪郭は分かるけれど、さすがに色まではわからない。

綺麗な色なのだ、いつだったかカルマの付き人の老女はいつていた。

けれど日々闇の中で暮らすカルマには、色に対しての認識力が非常に欠けている。

赤といわれても、カルマはよくわからない。

知っている色は暗闇の黒と、外出が許される朔日に見る星の色だけ。

綺麗な色とは、いったいどんな色なんだろう。

ふと闇が静かにつねるような、そんな感覚がカルマの体を支配した。違和感、といつても過言ではない。

なにかが、人ではないなにかが傍にいる。

そう直感した瞬間、掠れたような静かな呟きが聞こえてきた。

「女だ。美味そうな女がいる」

声の方向に、カルマは視線をやった。

視線の先にいたのは、暗闇の世界にいるというのに、えらい存在感を發揮している一人の男。

けれど男だと思ったものは、両耳の上辺りから角を生やしているで

はないか。

ならばこれが世に聞く鬼なのだろうか、カルマはそう思った。

毒と鬼

緩く着物を着崩し、カルマの傍に立つ鬼はとても美しかった。すらりと伸びた長身に、風になびく髪は腰を覆うほどに長い。整った顔立ちはどこか野生的で、カルマのような柔らかさはない。

なにより美しいのは、その瞳だ。

空に輝く星のような、眩しいくらいの光を宿している。

まちがいになく、人にあらざる美しさ。

けれど日々闇の中で暮らしているカルマは、彼の眷族を見ることも多い故、人ではないものなどさして珍しいものではない。むしろ人より身近な存在だと思う。

たしかに人の男サイズ大を見るのは初めてだったが、けれど人に似ているせいで恐怖もない。

とくに脅えもしないカルマに、鬼は面白くなさそうに顔を歪める。

「普通、いきなり現れた鬼に恐れ慄くのが人間じゃねえの？」

「なら私は普通じゃないようですね」

「可愛げのねえやつだな。食い散らすぞ」

「では死ぬ覚悟をなさってください」

「はあ？ 俺たち鬼はお前らが主食なんだぞ、死ぬわけねえだろ」

「でも私は普通じゃないですし…」

カルマの言っている意味が分からないといわんばかりの鬼だったが、やがて何かに気がついたようだった。

鬼はカルマの細い腕をとると顔を近づけ、鼻を鳴らした。

「お前、すげえ匂いがする」

「そうなんですか？ 自分ではわからないんですけど……、どんな匂いがするんですか？」

「……なにかが腐食したような、俺たち鬼には堪らねえ匂いだ。お前、なに者だ？」

じっと見つめられて問われれば、カルマはなんだかおかしくなって笑ってしまった。

まさか人知を越えるものといわれている鬼に、なに者かと問われるとは思いもしなかった。

笑われて仏頂面の鬼だったが、カルマが一しきり笑うのを待っている様は、返される言葉を期待しているようだ。

やがて笑いを沈めたカルマは、それでも緩んだ頬のまま鬼に言うてる。

「私、毒女どくめです」

「…毒女？」

鬼は少し驚いたように目を丸くした。

人にとつても珍しいとされる毒女は、やはり鬼にとつても珍しいらしい。

鬼はカルマの頭の前からつま先までを視線で滑らせ、そのまま何度も往復させている。

「全身を毒に侵されるとかいう、あの…？」

「そうそう」

「お前が？」

「そうです」

鬼はもう一度カルマの腕をとった。

捲れ上がった袖からのぞくカルマの細い腕に、鬼がその唇を寄せ、薄い唇が開いたと思ったら、ペロりと舐められた。

途端鬼は顔をしかめ、カルマの腕を離す。

その様子に、カルマがまた笑った。

「…毒女に会うのははじめてだけど、まさかこんな娘っ子のまじりたとはなあ。なんとなく感覚的に、年季のはいったババアばっかと思ってた」

「私も自分以外の毒女には会ったことはないですけど、多分みんな若いと思いますよ」

「なんで？」

「だって毒女ってその性質上、長生きとは無縁だと思いませんか？」

なるほど。

鬼が納得したように頷いた。

そしてふと、なにかに気がついたようにカルマを見る。

「にしてもお前、変な奴だな」

「実際普通じゃないですし」

「…そういうことってんじゃないやねえよ。俺は捕食者で、お前は捕食される側だろうが。　　ったく、てめえの肝っ玉はどうなってんだよ…」

うーんと、カルマが首をひねって唸る。

「毒まみれ、ですかね」

「……………」

もういい…と、やがて鬼が嘆息した。

冷たい毒

毒女どくめは基本、光の届かぬ場所です。

『闇にも通じるものは、闇をも知るべき』という理由らしいが、毒女の歴史は長く今ではもう調べるすべはない。

毒女のカルマも、普段は真つ暗闇の中にその身を置いている。

彼女が日々過ごしている場所は、近辺では知らぬものはないといわれる霊山の洞だ。

その洞の奥深く、何重にも木の格子をはめ込まれた座敷牢の中が彼女の居場所だった。

物心つく頃にはすでにこの洞で過ごしていて、もうどれだけののか定かではない。

いずれ死ぬときも、この洞の中なんだろうと思っている。

そのことに対してカルマは、別段異存も疑問もない。

たぶん欲望や探究心がほぼ欠けている人間性のカルマだからこそ、こんな現実ながらすんなり受け入れられるのだろう。

他に外部との接触がほぼない、という要素もある。

この霊山に地元の間人は入山禁止になって、実際世話をしてくれるこの老婆以外の人間をカルマは知らない。

それでも彼女は与えられたこの生活に不満はないし、このまま継続することに異議はない。

もしかするとこれがカルマなりの処世術なのかもしれない。

彼女が毒女であるということは間違いない、けれど他に生きる術を知らないのだから。

今しがたカルマの血を採取したばかりで、この座敷牢は眉を顰める匂いで溢れかえっていた。

けれどカルマにしては慣れたもので、採血用に切られた腕に包帯を巻いていく。

そんなカルマと格子越しに対面しているのは、彼女の血の入った瓶を手にしている老婆だ。

カルマの身の周りの世話をしてくれる人物で、名をキヨという。

この完全な暗闇の中ではなにも見ることは許されないが、気配と衣擦れの音でキヨが立ち上がったのが分かった。

「それではカルマ様、夕餉ゆいぢゆうの時刻までごゆるりと

「はい」

引き摺るようなキヨの足音が遠くなり、やがて消えた。

ぽつりと残されたカルマは、さて今日はなにをしようかと首を捻ったそのときだった。

座敷牢の中にふらりと舞い込んだ、人にあらざるその気配。

どうやら彼が来たらしい。

今日一日は話相手ができて退屈しなさそうだと、カルマは小さく微笑んだ。

「いらつしゃい、羅刹らじやく」

「お …、今日はまた一段とそそる匂いがするな」

「さっき血を抜いたから、きつとそのせいじゃないですか？」

どっかりとカルマの横を陣取るように座った、羅刹と呼ばれるこの男。

はたして男というべきか、雄というべきか。

羅刹は1週間ほど前の朔日の晩に出会った鬼だった。

あの晩少し話したことでカルマを気にいったらしい羅刹は、ちよくちよくこの座敷牢にやってくる。

住処を聞かれ少し離れた洞だと教えた翌日、彼はこの座敷牢に直接通じる横穴を掘ってやってきた。

どこから掘ってきたのかは、まったく先が見えないあたりかなりの距離ではないかと推測できた。

さすが鬼というべきか、やることが突飛だ。

ちなみにキヨは座敷牢内に横穴が開いたことに気が付いていない。

というのもキヨはこの牢の中には入ってこないし、もともと通風孔があるせいで洞に風が通るのは当たり前だったからだ。

加えてなにも見えないこの闇の中では、視界などで確認できるわけもない。

さてどんな話をしようかと思っていたカルマに、隣から不機嫌そうな声が投げつけられた。

「…なんでそんな、当たり前前に傷つけて血い抜いてんだよ」

「いや、当たり前前のことですし」

「お前は女だろうが！ ちったあ肌傷つけることに抵抗持ちやがれ！」

「そっはいわれましても…」

困ったなといわんばかりのカルマと、なぜだか憤っている羅刹。

毒女にとっての最大の価値は、その血肉だ。

鬼をも殺す最強の毒は、その体を傷つけて摂取する。

一つの傷が癒えぬうちに採取することもあり、そういった場合は同じ部分に傷をつけることはしない。

右腕の傷が癒えていなければ、左腕に刃を突き立てる。

左腕の傷も癒えていなければ、今度は左右の足のどちらか。

おかげでカルマの手足は傷だらけだ。

今日は左腕から採血したので、そこに包帯が巻かれている。

人であればこんな真つ暗闇の中ではなにも見ることはできないが、鬼は違うようだ。

羅刹はカルマの左腕を迷うことなくとつてみせた。

「またこんな、包帯なんぞ巻きやがって…痛まねえのか？」

「もう大丈夫です。慣れっこです」

「んなことに慣れんじゃねえっ」

怒鳴られて、カルマは首を竦める。

怖いというよりも、なぜか嬉しいという気持ちが沸いてくる。

なんでだろうと首を傾げたカルマだったが、やがてその理由が見えてきた。

いまだに感じる、自分の腕を掴む羅刹の手。

原因はたぶんこれだ。

「羅刹はあつたかいですね」

「お前が冷たさすぎるんだっつーの」

「そうなんですか？」

「なんで疑問形なんだよ……」

「こつやって誰かに触れられるのはじめてですから」

少なくとも物心ついたときから、誰かに直に触れ合うことはなかった。

キヨはカルマの着替えなどを手伝ってくれるが、そのときは必ず手袋をはめている。

カルマの汗も毒性を帯びていて、直接触れるのは人にとっては害があるらしいのだ。

そこでふと気がつく。

人ではないにしろ、この血は鬼にすら効くという。

「羅刹は私に触れても大丈夫なんですか？」

「こんなもんなら別に問題ねえな。多少なら血も飲んでもいけると思う」

「そうなんですか？」

「前にお前の汗舐めたる。あれで少し耐性がついた。俺らは人間よりよっぽど耐性が上みてえだからな」

ふむ、とカルマは考え込む。

その様子に羅刹が首を傾げた。

「なんだよ？」

「一つ、お願いがあります」

「だから、なに？」

「もうちよつとだけ、触ってもいいですか？」

言い終わる前に、カルマは羅刹の膝の上に乗せられていた。

すぐに筋肉で硬い腕が巻きついてきて、強い力で抱き締められる。締め上げられている、といっても過言ではなさそうだ。呼吸が出来ない。

あまりの軋むような痛みにも、カルマは羅刹の腕を叩いた。そうして羅刹に回されていた腕の力が若干弱まれば、ようやくカルマは息をつく。

「……死ぬかと、思いました」

「満足したか？」

「はい、死ぬほど」

悪びれもなく笑う羅刹に、カルマは『この腕になら殺されてもいいかな』なんて思ったことは内緒だ。

そつと羅刹の肩に、カルマは顎を乗せる。

羅刹の髪からは生い茂った若葉の香りがした。

「人っていいですね、すごくあつたかいです」

途端羅刹の気配が不機嫌そうに揺らぐ。

カルマは顔を上げて、羅刹の顔がある場所に視線をやってみる。やはり一切光が射さぬ場所では、その輪郭すら掴めない。

「人じゃねえ、俺は鬼だ」

人間と思われるのは好きじゃないらしい。ぶすつと不機嫌そうに呟いた言葉そのまま、羅刹の顔はどこか無然としていたに違いない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3594ba/>

鬼を食らう毒

2012年1月11日10時52分発行